

報道関係者 各位

2026.4.16
< 配信枚数 2 枚 >

■開催案内■

立命館土曜講座 2026 年 5 月テーマ

台湾と日本—文芸作品からその歴史を辿る—

開催日程 : 2026 年 5 月 16 日 (土)・30 日 (土) 10 時 00 分～11 時 30 分

開催方法 : ハイブリッド講座 (末川記念会館・Zoom ウェビナー)

2026 年 5 月の立命館土曜講座は、立命館大学国際言語文化研究所の企画として、ハイブリッド形式(末川記念会館・Zoom ウェビナー)で開講いたします。

どなたでも無料で受講いただけますので、ご関心のある方のご参加をお待ちしております。

記

■立命館土曜講座 2026 年 5 月テーマ「台湾と日本—文芸作品からその歴史を辿る—」

(1) 台湾人を「日本人らしく」する「国語」—戦前の皇民化文学から 21 世紀の百合小説へ—

日時 : 2026 年 5 月 16 日 (土) 10 時 00 分～11 時 30 分

講師 : 愛知県立大学外国語学部 准教授 ^{ちよう ぶんせい}張 文菁

(2) 白球が結ぶ台湾と日本—映画『KANO』と小説『蕉葉と樹の約束』を手がかりに—

日時 : 2026 年 5 月 30 日 (土) 10 時 00 分～11 時 30 分

講師 : 立命館大学文学部 教授 ^{み す ゆうすけ}三須 祐介

開催方法 : ハイブリッド講座 (末川記念会館・Zoom ウェビナー)

内 容 : 別紙参照

聴 講 料 : 無料

定 員 : 末川記念会館 180 人、Zoom ウェビナー400 人

※実施前日 12 時 00 分までに要事前申込。定員に達し次第、受付を終了。

申込方法 : 立命館土曜講座の WEB サイトよりお申し込みください。

<https://www.ritsumeai.ac.jp/doyo/>

主 催 : 立命館大学衣笠総合研究機構

そ の 他 : 文字通訳を配信しています。

以上

本リリースの配布先: 京都大学記者クラブ

●内容についてのお問い合わせ先

立命館大学衣笠総合研究機構 担当: 尾崎・堀

TEL.075-465-8224

別紙

■立命館土曜講座 2026年5月テーマ「台湾と日本—文芸作品からその歴史を辿る—」

(1) 台湾人を「日本人らしく」する「国語」—戦前の皇民化文学から21世紀の百合小説へ—

日時：2026年5月16日(土) 10時00分～11時30分

講師：愛知県立大学外国語学部 准教授 張 文菁

講師による内容紹介：

1895年から1945年までの50年間、日本の植民地統治を受けた台湾では、人びとは初めて「国語」としての日本語に触れることになった。共通語を持たなかった台湾の人びと——ホーロー人や客家人、戦後に渡台した外省人、そして原住民族(パイワン族・アミ族など16族)にとって、これは言語的にも文化的にも大きな変化であった。

1937年の日中戦争を契機に「皇民化政策」が進められ、終戦直前には日本語理解者が75%に達したとも言われる。この時期の文学で「日本人」はどのように描かれたのか。一方、戦後の作品では、この時代はどのように語られているのか。

本講座では、日本語小説である①周金波『志願兵』(1941)、②王昶雄『奔流』(1941)、および中国語小説③楊双子『台湾漫遊鉄道のふたり』(2020)を取り上げる。これらの作品を通して、台湾の人びとが植民地経験の中で自己をどのように見つめ直してきたのか、さらに21世紀の台湾にとって「日本」がどのような存在であるのかを、百合小説という新たな文学のかたちから考える。

(2) 白球が結ぶ台湾と日本—映画『KANO』と小説『蕉葉と樹の約束』を手がかりに—

日時：2026年5月30日(土) 10時00分～11時30分

講師：立命館大学文学部 教授 三須 祐介

講師による内容紹介：

日本プロ野球における台湾出身選手の活躍や、WBCにおける台湾代表の奮闘も記憶に新しく、台湾と野球を結びつけるイメージはある程度形成されているだろう。近年では、台湾野球の記憶をめぐる研究書も相次いで刊行されている。なかでも、2014年公開の台湾映画『KANO 1931 海の向こうの甲子園』は、日本統治時代の野球の記憶を広く喚起するとともに、台湾の「親日」イメージを補強することにもつながった。

2025年には、台湾先住民族作家ナカオ・エキ・パチダルによる小説『蕉葉と樹の約束』(未邦訳)が刊行された。この作品は、『KANO』が描く時代よりも早い1920年代の花蓮を舞台に、野球チーム「能高団」と、そこで活躍したアミ族の青年の姿を描いている。台湾社会のマジョリティである漢人でも日本人でもない、先住民族アミ族の視点から野球と植民地経験が語られている点は重要である。

21世紀の台湾において、「日本統治時代」はいかに語られているのか。そこには、単純な「親日」というイメージには還元できない、複雑な歴史認識と記憶が反映されている。本講座では、最新の文学作品などを手がかりに、この問題について考えてみたい。

■立命館土曜講座 <WEBサイト> <https://www.ritsumeit.ac.jp/doyo/>

1946年から続く、市民向けの無料公開講座。故・末川博名誉総長の「学問や科学は国民大衆の利益や人権を守るためにある。学問を通して人間をつくるのが大学であり、大衆とともに歩く、大衆とともに考える、大衆とともに学ぶことが重要」との思いのもとに、大学の講義を市民に広く開放し、大学と地域社会との結びつきを強めることを目指しています。